

曹洞宗 格地 天祐山公田院 仁叟寺

しゃくそんごうたんえ

釋尊降誕會（花まつり）



仁叟寺所蔵『釈尊誕生図』

貞享2年(1685)作

寛政9年(1797)再表具

縦240cm／横160cm(表具)

縦162cm／横127cm(画)

高崎市内で一番古い誕生図

高崎市指定重要文化財

「花まつり」は、桜の花も開く4月8日に行われる行事です。本来は灌仏会・仏生会・浴仏会・降誕会・龍華会等と言います。様々な花で飾った小さなお堂(花御堂)の中に、甘茶の入った水盤を置き、赤ちゃんの姿のお釈迦様の像(誕生仏)を祀ります。時にはこの花御堂を白い象に乗せて練り歩く場合もあります。お参りの仕方は、誕生仏の頭から柄杓で甘茶を注いでお参りします。お釈迦様の父親は釈迦族の王様で浄飯王、母親は摩耶姫とします。出産のため実家に向かう途中のリンビニー園で生まれました。お釈迦様は生まれると、すぐに七歩歩み、右手で天を、左手で地を指さして「天上天下唯我独尊(人は誰でもこの世に一人だけあって予備の人間はいない。命は貴いものである。私は苦しむ人々を救うことを第一としよう)」と唱え

ました。すると天に住む龍が感激して甘露の法雨を降らしたと言います。花御堂はリンビニー園を、甘茶は龍が降らした甘露の法雨を表わします。花まつりは、インド・中国・東南アジア諸国でも古くから行われている行事です。我が国では推古天皇代に元興寺で初めて行われました。お釈迦様の誕生を祝い、お釈迦様の智慧と慈悲の教えを信じていく事を誓う日です。また、子供がすくすくと育つ事を祈る日でもあります。



仁叟寺の花まつり風景

曹洞宗 格地 天祐山公田院 仁叟寺

しゃくそんねはんえ

釋尊涅槃會 (おねはんえ)



仁叟寺所蔵『釈尊涅槃図』

貞享2年(1685)作

寛政9年(1797)再表具

縦295cm／横185cm(表具)

縦236cm／横156cm(画)

高崎市内で一番古い涅槃図

高崎市指定重要文化財

うようにと前もって出かけ、その牛の頭に鼠が乗っており、到着寸前に鼠が牛の頭より降りたため、十二支は、鼠から始まる事になったと言います。現在の仁叟寺の涅槃会では、前述の涅槃図を掲げ、釈迦涅槃像に涅槃団子を始めとするお供え物をし、参拝に来られた方に、感謝と報恩台掌をいただいています。他にも仁叟寺梅花講の、ご詠歌による供養の詠讚も行なっています。

涅槃会は、涅槃講や涅槃忌とも称し、2月15日、お釈迦様の入滅の日に、勤修されます。涅槃とは、ニルヴァーナの訳語であり、迷妄の無くなった心の境地を指す言葉です。法曹中は、お釈迦様が娑羅双樹の下で涅槃に入った際の、頭を北にして西を向き右脇を下にした姿で臥し(北枕の由来)、周囲に十大弟子を始め諸菩薩、天部や獣畜、虫類などまでが嘆き悲しむ様を描いた涅槃図を掲げ、『仏遺教経』を読誦する事となっています。仏涅槃図の絵解きを行う事もあります。他にも、涅槃団子と呼ばれる五色の餅を供え、それを食す事も、涅槃会に行っています。仁叟寺の涅槃図は、4月8日の「降誕会」で掲げられる誕生図と対になっており、約400年程前に描かれた掛け軸でございます。十二支の由来にもなっている子丑寅卯辰……の順番は、お釈迦様の葬儀の弔問に訪れた順番で、猫が入っていないのは、鼠に騙されて違った日を教えられ、それ故、猫は鼠を追いかける、と伝えられています。また牛は、式に間に合



仁叟寺の涅槃会梅花奉詠風景